



## 直言

# いのち ～生命だけは平等だ～

福江 眞隆 (医療法人茨城愛心会 古河病院院長)

## 昨年度の巡回健診バス巡回件数は1万7000件超 すべては職員の自己実現のためが私たちのモットー 個々人は小さくても病院を存続していれば大きな力に

当院は茨城県古河市（こがし）鴻巣（こうのす）にあり、同県三和町（現・古河市）の三和記念病院が2005年7月、160床のケアミックス病院として新築移転、徳洲会病院としてオープンしました。現在の許可病床は234床で、実働199床。埼玉や群馬、栃木、千葉との県境に近く、私は「関東医療圏の臍（へそ）」と称しています。古河市の人口は約14万人です。

私が院長を拝命したのは、開院の2カ月前のことでした。筑波大学の先輩、野末睦（むつみ）・庄内余目病院院長に誘われ、同院に入職してからわずか半年のことでした。常勤医は私と口腔（こうくう）外科の中村敦歯科医師の2人だけ。羽生（はにゅう）総合病院を中心とするグループ病院の協力を得て、やっと開院しました。

07年10月には小規模多機能型居宅介護「ポプリ」を開設。これは徳洲会グループ初の試みでした。09年には夜間対応型訪問介護「四季」を開設しました。高齢の方が増加の一途をたどるなか、医療と介護は切り離すことはできません。独居や老老介護が増える社会では、病気を治すだけで後は知らないというわけにはいかないからです。

病院、介護・福祉施設、在宅がうまく連携して、はじめて超高齢社会に対応できると考え、とくに患者さんやご家族が不安になる夜間帯の介護サービスを始めたのです。

### 医師を確保することは 私たちの大きな課題だ

12年6月に39床を増床し、13年4月には訪問看護ステーションの「はなもも」を開設。目下、院内保育所も含め介護関連部門の移転準備中です。地域では毎年500人の人口減が進行する一方、高齢の方は毎年1000人増えていま

す。そこで、グループホームや高齢者住宅、介護老人保健施設の開設なども視野に入れ、地域の要望を受け入れていきたいと思っています。来年には、回復期リハビリ病棟（35床）の開設を予定しています。

地域での急性心筋梗塞は女性が全国1位、男性は2位です。悪性腫瘍の死亡率に至っては全国1位。これに対して専門医がいないうなか、グループ病院から応援をいただき感謝しています。人口10万人あたりの医師数は全国平均で206・3人に対し、茨城県は146・7人。常勤でなくとも、非常勤でも医師を確保することが大きな課題になっています。現在、当直は非常勤医任せです。常勤医は9人、外科医は私1人だけです。外来患者さんの数は伸びてはいますが、医師1人が減るだけで、収支に大きな影響が生じます。これをカバーしてくれているのが、看護師やコメディカルなどスタッフの頑張りです。平均在院日数は17・5日で、さらに短縮する努力はしていますが、それよりも患者さんを増やすことが至上命題です。

### スター医師がいなくても 地域に役立つ施設になる

救急は大きな問題ですが、「坂東（ばんどう）メディカルコントロール」というシステムがあり、古河地域では三次救急病院を含めた当院以外の3病院が主体となり、患者さんを引き受けてもらっています。当院の年間救急受け入れ件数は、昨年度1600件超でした。消防署のデータによると、当院の救急断り件数が少ないということですが、医師を増やし、断りをゼロにすることが大きな目標です。当院にはスター医師がいません。特筆すべき診療科もあり

---

ません。さらに、施設基準を満たしていないため、研修医もいないのです。常勤医も高齢化が進み、非常勤の当直医が、救急を断るというケースが出ています。

その一方で、巡回健診バス事業を昨年4月にスタートしました。現在、徳洲会の10病院で行っていますが、胸部・胃部X線併用タイプの健診バスを、地域のニーズに合わせて各医療機関で導入し、X線検査のほか血液検査や身長・体重・BMI（肥満度）などの測定を実施しています。

ふだん医療機関にかかることが少ないワーカー層を中心に、地域の多様な世代の方々に、病気の予防の重要性を知っていただきたいという思いから発案したものです。

職員の営業努力で、昨年度の巡回件数は1万7000件超。今年4月に古河市医師会に加入し、終末期の患者さんの受け入れも行うようになりました。透析の患者さんの登録件数は100人です。当院開設時、県下では療養病床が少ないことから、4階に療養病棟を開設することを決めました。個々人は小さくても、8年も病院を存続していれば、大きな力になります。すべては職員の自己実現のためにあります。

皆で頑張りましょう。